

他者との相互作用を考慮した幼児の造形表現プロセスの検討 —幼稚園 4 歳児クラスにおける幼児の見せる行為に着目して— (中間報告)

東京大学大学院教育学研究科 佐川 早季子

An Analysis of How Children Design and Make Objects Through Interaction With Others : Focus on 4-year-olds' Acts of Showing Objects

Graduate School of Education, University of Tokyo, SAGAWA, Sakiko

要 約

幼児が他者にモノを見せる行為は、経験や情報の共有を表現する共同注意を請求する行為であり、自己関係をつなぐ機能をもつと同時に、製作を進め新しい発想をもたらす機能をもつと考えられている。本研究は、幼児が他者にモノを見せる行為に着目し、幼児間の関係性の変化とそれに伴う製作プロセスの変化を明らかにすることを目的とする。幼稚園 4 歳児クラスを 1 年間参与観察し、幼児が他者にモノを見せる行為を見せる相手やタイミングについて分類した。1 年を 3 期に分け時期別の回数を比較・検討した結果、1 学期は大人に対して製作物を見せることが多いが、2 学期以降になると他児に対して自分の製作物を見せていること、他児に対しては製作後の完成した段階ではなく、製作途中で製作物や素材を見せることが多いことが明らかになった。

【キー・ワード】製作, 見せる行為, 共同注意, 社会的相互作用, 協働

Abstract

Children show objects to others to express and share their experiences and knowledge, demanding joint attention in the process. In design-and-make activities, such acts have the function of forming relationships with others and advancing the activity through the introduction of new ideas. This study aims to clarify how the relationship between children and the design-and-make process concurrently changes, focusing on children's act of showing objects. Participatory observation was conducted in two kindergarten classes of 4-year-olds for one year. The data were analyzed in terms of the addresses and timings of the participants' acts of showing. In terms of addresses, the analysis revealed that in the first trimester, children tended to show objects to adults (teachers, observers, and mothers) more than other children, while in the third trimester, they tended to show objects to other children. In terms of timings, they tended to show objects to the adults after making the object, whereas they tended to show objects to other children

in the middle of making the object.

【 Key words 】 design-and-making, acts of showing, joint attention, social interaction, collaboration

問題と目的

日本の保育では、戦後以降、幼児の創造性育成のため描画や製作などの造形表現が重視されてきた(花篤, 2009)。創造性育成だけでなく、造形表現は身体、社会性、感情、認知、創造性の発達と相互に関連し合うため幼児の全体的な発達に結びつくと言われている(Schirmmacher, 2001)。

造形表現を対象とする従来の研究は、個体能力主義的な研究が多く、何歳でどのような表現が見られるかという発達段階に基づく観点で検討されてきた(e.g. Luquet, 1927; Kellog, 1969; Gardner, 1980)。ただし、描画中心に研究がなされてきたため、保育現場で多用される廃材などを用いた製作に関しては、その固有のプロセスと年齢的発達に伴う変化は検討されていない。

造形表現が行われる文脈を考慮した研究では、幼児の造形表現が他者との相互作用を通してなされることが指摘されている(e.g. 山形, 2000; 松本, 2004)。協働での製作¹⁾に関する研究では、製作物や道具・素材といったモノが、幼児間で共有される認知の対象となり、役割分担や課題の共有を助け、協働の媒介になると考えられている(Hennessy&Murphy, 1999; Carr, 2000; Rowell, 2002)。言葉による相互作用だけでなく、モノを介した身体的な行為までもを含めた分析方法が開発され、研究が進められている(Seitamaa-Hakkarainen&Hakkarainen, 2013)。ただし、幼児に関しては、モノを介した相互作用は詳細に明らかになってはいない。

以上、幼児個人に着目した先行研究を踏まえ、相互作用に着目した研究の課題を克服するため、本研究では、保育の場で幼児が素材を使って製作する場面を参与観察し、幼児間のモノを介した相互作用に着目して製作プロセスを検討する。

モノを介した相互作用の一つとして、幼児が他者にモノを見せるときに発せられる「みて」発話が挙げられる。「みて」発話は、経験や情報の共有を表現する共同注意請求発話であり(綿巻, 1998)、興味関心や感動を共有することで自他関係をつなぐ機能をもつと考えられている(福崎, 2006)。また、Roden(1997;1999)は、幼児が製作を行う際の方略の一つとして、見せること(showing)を挙げ、見せたり、見せられて作品を評価することが製作活動を進め、新鮮なアイデアをもたらすとしている。つまり、製作において見せる行為は、関係をつなぐ機能と同時に製作を進め新しい発想をもたらす機能をもつと考えられている。そこで、本研究では、幼児が他者にモノを見せる行為に着目し、幼児間の関係性の変化とそれに伴う製作プロセスの変化を検討する。なお、製作の発達段階の研究では、4歳から5歳にかけての年齢が、製作物で遊ぶために目的をもって他児とともに製作することが見られる段階とされている(e.g. 吉田, 1991)ため、本研究では幼稚園4歳児クラス(4-5歳児)を対象とする。

¹⁾本研究では、平面・立体を問わずものをつくることを指して「造形」という語を用い、事例における廃材等を用いた立体での造形を製作と表記する。

方法

1) 観察の方法

<研究協力者>神奈川県内私立幼稚園 4歳児 2クラス 56名(観察開始時平均年齢 4歳 5カ月)

<観察期間>20XX年4~翌年3月(計34日)

<観察方法>子どもの会話が聞き取れるだけの距離を置き、随時メモを取った。また、ワイヤレスマイクをつけたビデオを用いて映像・音声記録を取り、その記録をもとにフィールドノーツを作成した。

2) 分析の方法

フィールドノーツより、幼児が他者に何かを見せる行為をカウントした結果、計220回の見せる行為が抽出された。1年を1学期(4月~7月)、2学期(9月~12月)、3学期(1月~3月)に分け(のべ観察時間:1学期53時間、2学期45時間、3学期45時間)、計220回の見せる行為を、モノを見せる相手やタイミング等について分類し、時期別に比較・検討した。なお、本研究に出てくる名前はすべて仮名である。

結果

研究1. 見せる相手との関係性に関する分析

1) 見せる行為の宛先(見せる相手)の時期別回数

幼児の見せる行為には、自他関係をつなぐ機能があるとの先行研究に基づき、幼児が誰と関係を築こうとしているのかを明らかにするため、幼児がモノを見せる相手について検討する。表1は、時期別に、幼児がモノを見せる相手が大人(保育者か観察者か保護者²⁾)か他児かにより分類した結果を示したものである。

表1 見せる行為の宛先(見せる相手)の時期別回数

	1学期	2学期	3学期
大人	41▲	28	27▽
他児	28▽	34	62▲
合計	69	62	89
検定結果	$\chi^2(2)=13.44$, $p<.01$		

注: ▲は残差分析の結果、5%水準で有意に高い比率であったことを示し、

▼は5%水準で有意に低い比率であったことを示す。

表1より時期別の回数について χ^2 検定を行った結果、有意差があり($\chi^2(2)=13.448$, $p<.01$)、残差

²⁾ 観察中には、保育参観中の保護者がそばにいる場合もあった。

分析の結果、1 学期は大人に対してモノを見せる行為の比率が有意に高く、他児に対してモノを見せる行為の比率は有意に低かった。一方、3 学期は、大人に対してモノを見せる行為の比率が有意に低く、他児に対してモノを見せる行為の比率が有意に高かった。すなわち、1 学期は、他児よりも保育者や観察者などの大人にモノを見せることが多かったのに対し、3 学期になると、大人よりも他児にモノを見せる方が多くなっていることがわかる。

2) 宛先別の見せるタイミング

さらに、見せる行為の前後の関連を探るため、幼児がモノを見せるタイミングについて分類した結果が表 2 である。

表 2 宛先別の見せるタイミング

	大人	他児
製作前	8	11
製作途中	21▽	64▲
製作後	67▲	49▽
合計	96	124
検定結果	$\chi^2(2)=21.80$,	

表 2 より、幼児が大人にモノを見せる場合には、製作後に見せる比率が有意に高く、製作途中に見せる比率は有意に低かった。また、その逆に、幼児が他児に見せる場合には、製作途中に見せる比率が有意に高く、製作後に見せる比率が有意に低かった。すなわち、大人に見せるときには製作後に見せることが多く、他児に見せる場合には製作途中に見せることが多いことがわかる。

以上より、1 学期には大人に対して製作物を見せることが多いが、2 学期以降になると、他児に対して自分の製作物を見せていること、他児に対しては製作後の完成した段階ではなく、製作途中に製作物や素材を見せることが多いことがわかる。このような事例数の比率の変化には、1 学期に多く見られた大人に承認や賞賛を要求する見せる行為（事例 1）だけでなく、自分のアイデアを示すため（事例 2）や、素材や製作手段を教えるための見せる行為（事例 3）が多くなり、他児と製作過程の共有を図っていることが示唆される。

事例 1 (1 学期:4/17) おさむが空き箱でつくったロボットを観察者の方に向け、「見て、これ、なんかよくない?」と言う。観察者が「いいねえ」と答えると、おさむが「いかしてるんだ」と言う。

事例 2 (2 学期:10/15) みさは、プラスチック容器の中に紙片を入れた製作物をれんたの前に差し出し、「ほーら、見て」と言う。れんたはそれを見て、「どうやってやったの?」ときく。

事例 3 (3 学期:3/7) にながトイレットペーパーの芯に毛糸を巻きつけながら、隣にいたみほに「みほちゃん、見て、こういう風にしてやってもいいよ」と言う。みほは、になの手元をのぞきこむ。

注: 下線部は見せる行為であることを示す。

今後の展望

今後は、幼児が他児にモノを見せる場面での製作物の変化に焦点を当て、幼児間の見せる行為の時期ごとのちがいを検討することで、協働での製作プロセスの変化を明らかにする予定である。見せる行為のカテゴリー分類を行い、量的な分析だけでなく、質的な分析も含め、前後の文脈を加えて分析を進めたい。

引用文献

- Carr, M. (2000). Technological affordance, social practice and learning narratives in an early childhood setting. *International Journal of Technology and Design Education*, 10, 61-79.
- Coates, E.& Coates,A. (2006). Young children talking and drawing. *International Journal of Early Years Education*, 14(3), 221-241.
- 福崎淳子(2006).『園生活における幼児の「みてて」発話—自他間の気持ちを繋ぐ機能—』相川書房. 143-166.
- Gardner, H.(1980). *Artful scribbles: The significance of children's drawing*. New York:Basic Books.(星三和子訳(1996)『子どもの描画—なぐり描きから芸術まで』誠信書房)
- Hennessy,S.&Murphy, P. (1999). The potential for collaborative problem solving in design and technology. *International Journal of Technology and Design Education*, 9, 1-36.
- 花篤實(2009).『新造形表現—理論実践編』三晃書房.
- Kellog, R.(1969). *Analyzing children's art*. Palo Alto, California: National Press Books.(深田尚彦訳(1979).『児童画の発達過程』黎明書房.)
- Luquet, G.(1927). *Le dessin enfantin*. Paris: Alcan.(須賀哲夫訳(1979).『子どもの絵』金子書房.)
- 松本健義(2004). 造形教育の変革：協働される創造と知. 石黒広昭(編)『社会文化的アプローチの実際』北大路書房.
- 奥美佐子(2004).幼児の描画過程における模倣の効果. 保育学研究. 42(2). 59-70.
- Roden, C. (1997). Young children's problem-solving in design and technology: Towards a taxonomy of strategies. *Journal of Design and Technology Education*, 2(1), 15-19.
- Roden, C.(1999). How children's problem solving strategies develop at Key Stage 1. *Journal of Design and Technology Education*, 4(1),21-27.
- Rowell, P.M.(2002). Peer interactions in shared technological activity: A study in paritipation. *International Journal of Technology and Design Education*, 12, 1-22.
- Schirmmacher,R. (2001). *Art and creative development for young children*. New York:Delmar.
- Seitamaa-Hakkarainen,P.&Hakkarainen,K. (2013). Design thinking in elementary students' collaborative lamp designing process. *Design and Technology Education: An International Journal*, 18(1), 30-43.

山形恭子(2000).『初期描画発達における表象活動の研究』風間書房.

吉田泰男(1991).『美的教育原論—あそびの中に感性和知性の内化と外化を求める幼児造形教育論の確立—』文化書房博文社.

若山育代(2010).年長児の非再現的協同描画における協同性の事例研究：非再現的協同描画の支援を目指して. 美術教育学：美術科教育学会誌, 31, 415-427.

綿巻徹(1998).言葉の使用からみた心の交流. 丸野俊一・子安増生(編)『子どもが「こころ」に気づくとき』ミネルヴァ書房.

謝 辞

本研究にご理解とご協力をくださった子どもたち, 幼稚園の先生方, 保護者の皆様に心より御礼申し上げます。